私の学生時代

師と友

二瓶要蔵

波多野先生のこと

私が同志社に行ったのは明治三十六年四月で、同志社の最も寂しかった時代である。同志社に宣教師との争いがあり、同志社は徴兵猶予もなく、上級官立学校に入学する資格もとり上げられたから、よほど基督教に関係あるものの子弟でないと入学しなかった。それで生徒の数も甚だ少なく、皆で五、六百でなかったかと思う。それで寮もがら空きで西寮北寮などは閉鎖してあった。しかし、地方より同志社を特に選んで入学して来た学生も多く、寄宿舎生は全校生の半数をしめていた。普通部というのは七年制で、それから大学に行くようになっていた。苦学生が多かったがなかなか勉強心が強く、また真面目であった。

その後同志社も文部省の認可中学（基督教を教えても認可を与えるということとなり）となり、だんだんと中学も整頓して来た。それには中学部長となった波多野培根という先生の功績を忘れることは出来ない。先生は何時も和服で長身で眼を半分開いたようにしていた人であるが、実に厳格で、その言や千鈞の重みがあった。朝のチャペルの時間などに先生が壇に上るとどんなに騒いでいてもしゃんとするほど威厳があった。悪い生徒を訓戒するが、何時間でもじゅんじゅんと話してやまない。先生にとっつかまると皆恐れ戦いていた。ある年に卒業生の中にタバコを飲むものが数人あることを知らせて来た。その時、私は神学生であったが、総寮長をしていたので、波多野先生に言ったところ、先生はこの際タバコをのむことをやめさせるために、その卒業生を卒業させないようにしようと、タバコをのむ学生を卒業者の名簿より削ってしまった。それで父兄も上京して大騒ぎとなり、誰がこれを密告したかということで学生間では大問題となった。しかし卒業式がすんだ後、先生は卒業証書を渡した。波多野先生は実に厳格であったが、温情もあって、先生に出された学生でも、決して先生をうらまず、かえって今日まで慕っているものが多い。有名な品川義介君などもその一人である。

師と友

もう一人、私の時代に同志社の復興に功献した人は、原田助先生である。同志社の宣教師騒動以来、組合教会および熊本バンドの大先輩等は、同志社に好意を持っていなかったが、だんだんとその心もとけて、原田助先生が校長兼総長として赴任して来た。原田先生は常識家であり、円満な人であり、また人と協和し得る人であったから、官界・財界の有力者ともよく交流もあったので、新島先生の宿願であった大学制を堅立することが出来た。これまでずっと衰微して中学が主なものとなっていたが、大学制度にして昔の同志社の意気を復興したのである。それで生徒も多くなり、学校としての位置も世間より認められるようになり、京都大学と同列に併称されるようになった。しかし、同志社は（これは

同志社の悪い習慣であるが）また騒動が起って先生が退陣されたことは惜しいと私は思っている。

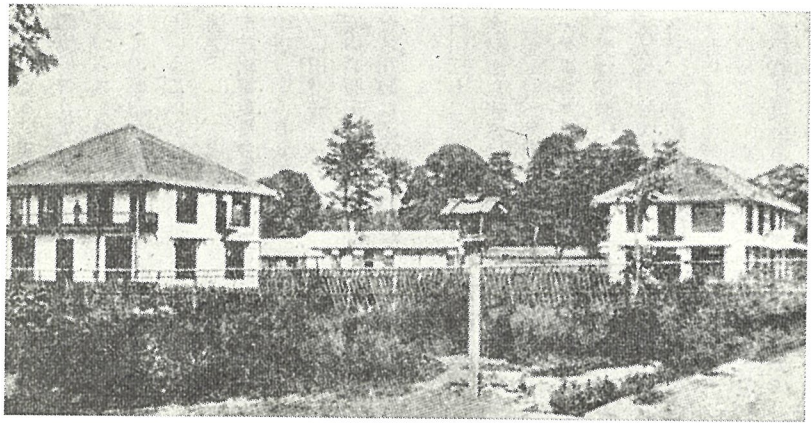
普通校で私と同級であったことのある石川芳次郎は、その後、永く校友会長として同志社に物心両面に永くつくされた。今の校友会長の村田竹治郎君は私が神学校に行った後に普通部の上級生であった。大塚節次君、湯浅八郎君らも普通部の上級生におられたのである。皆同志社の功労者であって、この時代の人々は皆ある意気があって、新島精神が同志社に残って、何か大望心があったように思う。

波多野培根氏

正直で真面目な心

福沢諭吉先生は理性の人であり、常識の人であり、どこまでも打算で行く人で、日本の大教育家であって、日本に大実業家を多くその学校より出した。しかし、新島先生は永く外国におられ、維新のときに生れられたためか、憂国熱情の人で、それに新英州の熱心なるピューリタンの基督教の信仰を深く持っておられた。同志社はとても福沢先生の知性には叶わないのであろうが、同志社に特徴的なものがあるとすれば、新英州の真面目なる信仰より来る正直、真面目な心であろう。それが今日まで同志社人の特色で、同志社の人は正直で真面目であることで世間からも買われて来た。同志社の使命はここにあると思う。真面目なる精神がますます発揮されることを願う。同志社は官立の大学に学力において、素質において、どうしても一歩を譲ると思うが、この真面目な嘘を言はぬ、信用すべき人物であるということについては、いかなる大学にもまけぬというならば、将来日本に最も有用な人物を出すことが出来ると思う。今日才能知識のある人物は沢山あるが、本当に信頼すべき六尺の子（幼児のこと）托すべきという人物がなくなりつつある。実業界でも、政治界でも、学界でも、宗教界でも、こういう人物がだんだん少なくなって行く。新島先生の本来の目的である良心を手腕に運用する人物の輩出せんことを祈るものである。

（校友・聖ヨハネ教会牧師）



明治時代の第一、第二寮